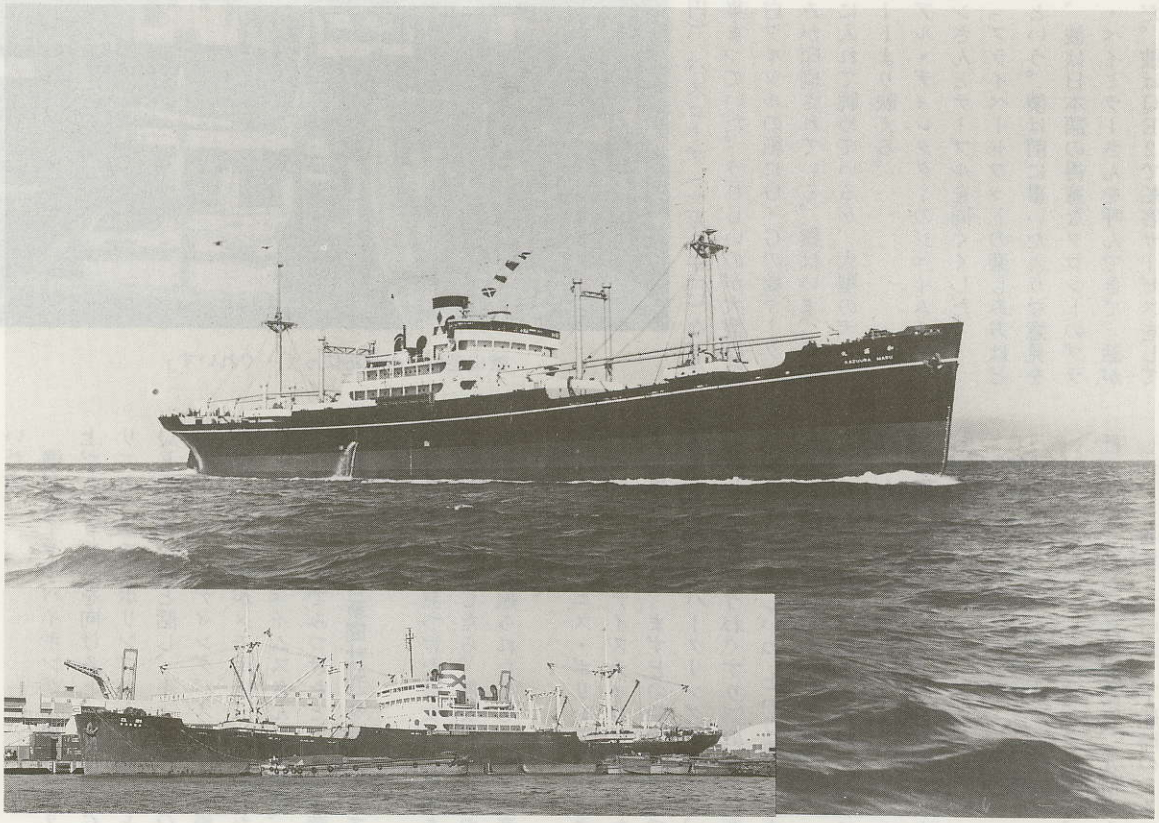
和　浦　丸

《主要目》貨物船、三菱商事所属、6,804総トン（10,000重量トン）
主機ディーゼル1基、出力4,000馬力、最高速力16.5ノット、1938年
三菱長崎造船所建造

苛烈な戦火をかいくぐった奇跡の貨物船



写真上　三菱重工業

戦後は韓国のフラグシップに

さきの大戦で日本は、二千四百隻、八百万総トンという膨大な数の商船を失った。

この喪失量は、開戦前に世界第三位だった六百三十万総トンの保有量をはるかにこえるものであり、戦時中急造された船を含め、戦前わが国が誇った「日の丸商船隊」の船ぶねのほとんどが、多数の人命とともに海底深く没し去った。終戦を迎えたとき、戦前の優秀船で生き残ったものは、氷川丸、高砂丸、有馬山丸など、数えるほどしかなかった。

ここに紹介するニューヨーク航路の貨物船「和浦丸」（かずうらまる）は、その数少ない残存船の一隻であるが、大戦後は韓国に接収され、「コリア」と改名、再び竣工時と同じニューヨーク航路（韓国〜NY）に復帰した。当時彼女は、国づくりの活力がみなぎる韓国の、最大にして最優秀の商船だった。

かつて「和浦丸」に乗り組み、激しい戦火をかいくぐってきた船員たちは、戦後、韓国貨物船「コリア」として立派に再生した彼女の姿を太平洋上に見たとき、いい知れぬなつかしさを覚えたという。

軍艦の世界では、旧帝国海軍の駆逐艦「雪風」が、数多くの海戦を戦いぬいた奇跡の艦として知られている。同艦は、戦後は中華民

国海軍の主力艦「丹陽」と名を改めて活躍したが、韓国商船隊のフラグシップに生まれ変わった「和浦丸」もまた、「雪風」に似た運命をもった奇跡の船といえよう。

ニューヨーク航路の貨物船として誕生

「和浦丸」は、一九三八（昭和十三）年十二月に三菱長崎造船所で誕生した優秀ディーゼル貨物船で、三菱商事のニューヨーク航路に就航、その華やかな生涯を踏み出した。

一九三八年十二月といえば、開戦まであと三年。したがって彼女が、平時の日本貨物船としてつつがなく稼働したのは、残念ながらほんのわずかな期間だった。

一九四一（昭和十六）年半ばを過ぎると、日米間の国交は次第に険悪化し、日本船がパナマ運河を通過するときには、必要以上に厳しい臨検を受けるようになった。結局、その年六月の内地帰港のニューヨーク航路が、彼女にとって戦前最後の外国航路となった。

同年九月、徴用。宇品へ回航。木製の偽装砲や爆雷発射台が、甲板上に装備された。

太平洋戦争が勃発した同年十二月八日のその日、陸軍輸送船「和浦丸」は、ルソン島北岸のアパリに上陸する陸軍将兵二千人を乗せて、バシー海峡を南下していた。

この上陸作戦に続いて、ルソン島サンフェルナンド、ラングーン、パラオ、ラバウルなどへの輸送に従事。翌一九四二（昭和十七）年後半には、ニューギニア輸送作戦に参加した。ポートモレスビー攻略部隊をラバウルからニューギニアへ運ぶこの作戦は、十カ月間続けられ、多くの貨物船が失われた。

疎開船対馬丸の遭難現場を脱出

一九四四（昭和十九）年八月二十一日の夕方、「和浦丸」は、日本郵船のTクラス貨物船「対馬丸」など三隻で船団を組み、那覇を出航、長崎へ向かった。船倉内には、戦火を避けるため、沖縄から九州へ疎開する学童千五百十四人が乗船していた。

「和浦丸」の村上船長は、乗船者が幼い学童であるため、特に警戒を厳しくして操船に当たった。だが翌二十二日深夜、船団がトカラ列島の悪石島沖を航行中、悲劇が突如、僚船「対馬丸」を襲った。米潜水艦「ボウフィン」の発射した魚雷四本が、「対馬丸」に命中。船は、船倉に多数の児童を残したまま、わずか十一分で沈没した。船とともに暗い海に消えた犠牲者は、七百八人の学童を含め実に千五百二十九人。「タイタニック」号の遭難者千五百三人を上回る大惨事となった。

二十クラス近くの学童数に匹敵する幼い生命が失われたこの胸の痛む事件については、戦後何冊かの著書が出ているほか、アニメ映画も制作され、今では広く知られている。

もし魚雷が「和浦丸」に命中していたら、「和浦丸」の船倉には「対馬丸」に倍する学童が居たので、犠牲者はもっと多くなっただろう。このあたりに、筆者は「和浦丸」の強運を思わざるをえない。ともかく彼女は、うしろ髪を引かれる思いで現場を脱出、二日後に長崎に入港し、学童を無事上陸させた。

戦況は日増しに不利となり、日本船の被害も激増したが、彼女は不思議に敵の攻撃を免れていた。だが、終戦直前の一九四五（昭和二十）年七月下旬、釜山港口でついに触雷。港内に擱座したまま終戦を迎えた。

戦後、「和浦丸」は韓国の手で引き揚げられ、韓国貨物船「コリア」としてニューヨーク航路にカムバックしたことは、前述のとおりだ。のちに不定期貨物船になってからは、日本の港にもその姿を現した。

筆者も横浜港でしばしば彼女のタンブルホームの特徴ある船体を見かけたものだ。ひっそりと停泊している「コリア」の赤錆だらけの外板を眺めたとき、昭和の激動期を生き抜いてきた彼女の深い年輪が感じられた。

一九七六（昭和五十一）年、彼女は釜山で解体され、三十八年の波乱の船歴を閉じた。

（山田　廸生）